れんあい!!～けいおん!!×恋愛～

伊達

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
れんあい！！～けいおん！！×恋愛～

【Ｎコード】
Ｎ９８７１Ｘ

【作者名】
伊達

【あらすじ】
けいおん！の学園恋愛物です。主人公（オリキャラ）が女の子（平沢唯）と出会い変わってゆく、ボーイミーツガールって奴ですな。
色んなネタ、ぶち込んでます。いや、ぶち混んでます。
カオスっ気ありますが、お気になさらず。

笑顔！！（前書き）

この作品はけいおん！の二次創作です。
苦手な方は戻るを、どうぞ。
あ、あと唯は俺の嫁！って方は死ぬ気で感情移入するか、戻るを、どうぞ。

笑顔！！

雪の降る中で、少女は聴いた。
少しの人混みを作りながら、奏でられる音を。
その音の元を探した。
楽しそうに歌い、演奏する少年がいた。
その音は、少女の心に響いた。

桜の降る中で、少年は見た。
通りすぎる足音から置き去りにされた一つの物。
その物の元を探した。
息を切らしながら、走り去って行く少女がいた。
歩道に置き去りにされたそれを拾い、

少年は歩き出した。

第一話　笑顔

上崎（かみさき）　晃（あき）。
これが俺の名前だ。
そう、間違いない。
つまり、この生徒手帳は俺の物ではなく、

（やっぱ、さっき走ってった奴が落としたのか）

という事になるのか。
おっと、説明しとかないとな。

ん？　誰にって？
気まぐれでこんな変な物を読んでる人がいるかもしれねーだろ！！
世の中なにが起こるかわからないからな！！
閑話休題ィ！！

本日は新年度初日。
そして、今日から俺は！！高校生である。
別に金髪で鬼畜で外道な彼の様に、高校デビューを目論んでいる訳ではないが。
むしろ、その逆とも言える。
あまり人と関わりたくない。理由はまたの機会に。
んで、そんな俺が、都合よく今年から共学となった、私立桜ヶ丘高校に向かっている最中。
誰かが仕組んだのだろうか、食パンをくわえた少女と激突、とまではいかないまでも、隣を走り去って行った少女が生徒手帳を落とした。俺の目の前に。

（仕方ない、ちょっと中を拝借するか）

平沢　唯。
同い年か。
って事はこいつも新入生だよな。
入学式までまだ余裕はあるはずだ、何で急いでたんだろ。
まさか、目覚まし時計の時間を見間違えて、入学初日から遅刻遅刻～とか言って急いでたとか。
そんで、今ごろは学校で見間違えてた事に気付いて、校門辺りで見間違えた～って叫んでるとか！

（・・・我ながら馬鹿な想像だな、ありえやしない）

アホな考えを放りすて、新たに考える。

（届けてあげるべき、だよなー）

俺は、人と関わるのを嫌う。
というより、人を信じるのを、頼るのを、助け合うのを、好意を持つのを、やめたのだ。
もちろん例外はある。
友人がいない訳ではない。
いや、かつてはいなかったが。
今は、いる。
親友であり、仲間であり、恩人でもある二人の友人。
だが、彼ら以外の人達を、俺は知ろうとしなかった。
幼い頃に、人の汚くて卑しくて厭らしい部分ばかりを見てきた俺にとって。
人とは汚くて卑しくて厭らしい生き物でしかない。
そればっかりじゃないのはわかってる。
現に、俺の唯一ならぬ唯二の親友は、真っ直ぐな奴等だと思った。
だからと言って全ての人に、「良い人もいる」を適用させる気はないし、当てはまるとも思わない。
接してみないとわからない？
確かにそうだ。信じて歩み寄ってみないとわからない事もあるだろうさ。だけど。
裏切られるのは、もうごめんだ。
それに、友達を増やそうとか、そんな小学一年生チックな決意も秘めてないし。
量より質。友達は、あいつらだけで十分だ。
ま、高校は別になっちゃったから、登場はいつになるかわからんが。
親友なのに何で別なのかって？色々あるんだよ！
都合とか事情とか色々な！

あれだぞ、作中にはまだ出てこないだけで、俺はほぼ毎日あいつらと会う設定なんだぞ？
作中とか設定とかなに言ってんだ俺は！？
ええい、閑話休題ィ！

（・・・ま、届けるだけならいいか）

そうして、俺は単なる気まぐれで、ほんの些細な気まぐれで、この手帳を持ち主に届ける事にした。
学校に到着、自分のクラスを掲示板で確認。と、そこで平沢　唯の名前も同時に確認。

（一緒のクラス、か）

普通の感覚なら、ここでこの生徒手帳をきっかけにお近づきに～といった風になるんだろうな。
でも、

（探す手間は省けたが・・・チッ、めんどくせぇ）

もしも、向こうがそういう考えを持ったなら、と思うと頭が重くなる。
ま、話しかけられても、不機嫌そうに突っぱねたら大丈夫だろ。
これが大丈夫というのも、やはり変な思考なのだろうが、気にしない。
ひとまず不機嫌面全ツッパを心に決め、教室へ向かう。
教室へつながる廊下を曲がろうとしたその時、視界が暗転し、気付けば天井を仰ぎ見ていた。
と同時に、

「いっ！・・・てぇ～」

顎に鈍器の様な物で殴られた様な、激痛が走る。
決してバールの様な何かではなく。
電流が走った訳でも、ましてや野菜サラダが走った訳でもない。ママ早い。なんの話だ！？
痛みに気が動転して、意味不明な事を口走って、もとい思い走ってしまったが、とりあえず冷静になってみる。
なってみたところ、どうやら誰かとぶつかってしまったみたいだ。

「う～、いたい～・・・あっ、だ、大丈夫！？」

と、俺とぶつかったであろう人物が、頭をさすりながら涙目で、心底心配したふうに尋ねてくる。

「ああ、俺は大丈夫・・・ん？」

この女、見覚えがあるぞ。しかもごく最近。
具体的に言えばついさっき。
もっと具体的に言えば生徒手帳的な物の写真欄で見覚えがあるぞ。
ティンと来た！
間違いない、写真よりも間抜け面をしているが、こいつがあの生徒手帳の持ち主だ。

「なぁ、あんた平沢さんだろ？」

言いながら、先ほど拾った生徒手帳を渡す。

「あっ、あった！よかった～！もしかして拾ってくれたの！？」

満面の笑みである。
眩しすぎるぞ、1ターン待たなくてもソーラービームが打てそうだ。
だがここで、はいそうですと言おうものなら、こいつは俺が善人だと勘違いするだろう。
その勘違いはこちらにとっても不都合なので、適当にごまかしとくか。

「いや、気づいたら手元にあったんだ、拾って届けようと思った訳では断じてない」

我ながら完璧なカモフラージュだっ。

「え、すごい！それって、無意識の内に落とし物を届けちゃう程度の能力が備わってるって事だよね！？」

その発想はなかった！！
つうか何だその能力、発動範囲狭すぎだろ！！

「え～？でもすっごく便利だよ？？」

「人の心を読むなっ！！さとり妖怪かお前は！！その能力の方がよっぽど便利だよ！！」

「別に読んだわけじゃないよ～。なんとなく、かな？」

「なおさら凄いわ！！」

はっ、いかんいかん。
すっかり奴のペースに乗せられてしまった。
何を楽しそうに会話してるんだ俺は。

そうだ、確かに楽しいかもしれないが、それも今だけだ。
こいつもすぐに嫌な部分が見えてくる。
裏切られるくらいなら。
裏切られるくらいなら、信じなければいいんだ。
期待するな。
あいつらの様な・・・悠(ゆう)と晴(はる)の様な奴らは、簡単には現れない。
もしかしたら、二度と。

「・・・じゃあ、俺そろそろ行くから」

そう言って、その場を後にし、教室へ向かおうと歩を進める。

「あ、待ってよー」

トコトコと小走りで近づき、横に並び歩く平沢。

「ねぇねぇ、男の子って事は同じ新入生だよね？お名前なんていうの？」

「上崎　晃」

一瞬、もう無視してしまおうか悩んだが、どうせ一緒のクラスだ。
いずれ知られると思い、最低限の自己紹介。

「アキ君だね！私は平沢　唯だよ！」

「知ってる」

「ほぇ！？何で知ってるの！？エスパー！？」

「生徒手帳」

「あ、そうだったね。すっかり忘れてたよ」

「何秒前の出来事を忘れてんだよ・・・」

「ねぇねぇ、アキ君は何組だった？」

「3組」

「え、ホントォ！？やったぁ、一緒のクラスだよ！」

「何で喜ぶんだ？」

「え～？だって、アキ君みたいな良い人と一緒のクラスなんだよ？嬉しいに決まってるよ！」

やっぱり。

勘違いされていた。

これは由々しき事態だ。やっぱり生徒手帳なんか拾わなければよかった。

俺が良い人？有り得ない。何を言ってるんだこいつは。

あれは単なる気まぐれだ。大体、落し物を届けただけで良い人って。

良い人になるのって簡単だな。みんなもやってみよう。

「・・・悪いけど、友達探しなら他を当たってくれ」

こういうタイプの奴は、真正面から拒絶するのが一番だ。

何度も経験してきた。

ほぇ？と間の抜けた声を出し、怪訝な顔をする平沢に言葉を続ける。

「そういうの迷惑だから。俺に構うな」
と言い残し、少し足早に教室へ向かう。
最後に見た、呆気に取られたような、少し寂し気な平沢の顔が、印象的だった。
人を拒絶するのは、何度も経験してきた。
けど。
何度経験しても、慣れないもんだ。
あいつの印象は。
生徒手帳を落とすなど、どこか抜けている気がする。何か雰囲気でわかる。
あと、実物は写真で見るより結構可愛い。
色恋沙汰には興味ないが。
それと、一番思った事は。
暗い表情が、とても似合わない奴だ。

（ま、これで一件落着だ）

人を拒絶して一件落着、か。
とことん、最低な奴だな、俺は。
でも、これでいい。
これであいつも、俺みたいな奴と関わらなくて済むし。
俺も、人と関わらなくて済む。
丸く収まったんだ。

（3組・・・ここだな）

教室のドアを開け、座席表を見て出席番号順に座る。
少し遅れて平沢が入ってきた。

と、それを見つけた女子（平沢の友達だろう）が、歩み寄って話しかけている。
生徒手帳絡みの話をしているみたいだが、我関せず。
教師が来るまで寝ていようと思い、机に突っ伏したのとほぼ同時に

「和ちゃん、この人がアキ君だよ！」

と、聞き覚えのある声に名を呼ばれた。
この元気ハツラツで元気イッパイな声の主。
それは、まぎれもなく、ヤツさ。
顔を起こし、声のした方を見る。
平沢と、赤いフレームの眼鏡が良く似合っている、知的な感じの女子。

「初めまして、真鍋　和です。唯とは幼馴染で、クラスもずっと一緒なの。上崎君が唯の生徒手帳を拾ってくれたのよね？どうもありがとう」

ペコリ、と頭を下げてくる真鍋さん。
凄く礼儀正しい、というかあんたがお礼言う事じゃないだろ。
あんたは平沢のなんだ。
保護者か。

「この子、昔っからおっちょこちょいで抜けてる所があるのよね。だからいつも心配させられるの。だけど根は凄く良い子だから、上崎君も良かったらこの子と仲良くしてあげてね」

「保護者かっ！」

お母さん気質にも程があるぞ！

思わずツッコンでしまったじゃないか！

「どーぞ仲良くして下さい！」

「お前はさっきの話を聞いてなかったのか！」

満面の笑顔で手を挙げながら言った平沢にも、思わずツッコミ。
なんだその笑顔は、さっきの寂し気な顔は気のせいか！？
ああいうのはあんまり気にしないタイプの人か！？

「ほぇ？さっきのって、ああいうネタじゃないの？」

アホの子か、そうか！
横で真鍋が「さっきの話？」と聞いているが、何でもないと流す平沢。
と、教師が教室に入ってきた。
各々が席に着く。
平沢と真鍋も、また後でと挨拶を交わし、散っていった。
全員が着席したのを確認した担任が、出席を取る。
今更気付いたが、このクラスに男子は俺一人だった。
まだ共学になりたて、やはり男子は全然いないみたいだな。
ま、いようがいまいがどっちでも構わんが。
そして、とりあえずの自己紹介を経て（もちろん俺は名前を言うだけの質素な自己紹介）席替えタイム突入。
お目当てである窓際の一番後ろの席を見事引き当てた俺は、少し浮かれた気分で席を移動する。
だってそうだろ？窓際の一番後ろと言えば、人との関わりが一番少ない所だぜ！？
前と右隣の席の奴と関わらなければ、この席に位置する間は安泰だ！
よしよし、これで周りに大人しい奴らばかり集まってくれれば完璧

なんだが。
贅沢は言わないぜ！

「あ、後ろアキ君だ！わーい、よろしくねー！」

終了のｄ（＾０＾）ｂお知らせ
よりにもよってお前か、平沢！
と、俺が嘆いている間にＨＲは終了し、入学式特有の早めの下校時間となった。
周りがガヤガヤと騒ぎ出し、新しい出会いを満喫する中。
俺は一人、颯爽と教室を飛び出し帰路へ。
校門を出て、桜並木の通りを歩く。
すると。

「ねー待ってよアキ君ー！」

またヤツだ。
やれやれ、お前はもう一回言わないとわからんみたいだな。
俺は覚悟を決め、振り向く。
そして、問う。

「なぁ、俺に構うなって言ったよな？」

「それってなんでなの？」

「迷惑なんだよ」

「なんで迷惑なの？」

「人と接するのが嫌いなんだよ」

「どうして？」

うわー。うぜー。
あと無限ループ怖いわー。
つうかちょっとイライラして来たな。

「お前に話す必要ねぇだろうが」

「話してくれないなら、私はずっとアキ君に構うよ？」

「・・・っ、いい加減にしろよ！今日会ったばっかだろうが！放っとけばいいだろ、俺みたいな奴は！」

「やだ」

っ、こいつは何なんだ！？
意味が分からない！理解不能だ！
今日初めて会って、構うな、迷惑だって言われた男に、何でそこまで！
そんな変な奴、無視しとけばいいだろ！
構わなければいいじゃないか！
俺と関わっても関わらなくても、お前の人生に何の変化も影響もないだろ！

「だって、決めたんだもん」

と。
平沢は言葉を続けた。

「決めた？何を？」

そう訊くと。
平沢は。
今日見た中でも。
一番の笑顔で。

「アキ君と絶対友達になるって、決めたんだもん」

そう言った。
俺は思った。思ってしまった。
俺と関わっても関わらなくても、平沢の人生には何の変化も影響もないかもしれない。
けど。
平沢と関わることで、俺は何か変わるかもしれないと。
変われるかもしれないと。
平沢の笑顔に気づかされたんだ。
俺は。
裏切られるのが怖い、それを理由にして。
人と関わる事から逃げていたんだと。
本当は。
本当は、人と話すのが、遊ぶのが、関わるのが、大好きなくせに。
幼い頃のトラウマを、いつまでも引きずって。
逃げていたんだと、気づかされた。
そんな自分が情けなくて。
だけど・・・少し、ホッとした。

「なんで・・・俺なんだ？」

気持ちも若干落ち着いて来たので、とりあえず一番疑問だった事を

聞いてみる。
まさか、生徒手帳だけが理由じゃあるまい。
「えっとねぇ・・・なんでだろ？わかんないや」
「・・・は？」
なんだって？
「最初に構うなって言われた時に、なんとなく気になったんだよね～。そう！なんとなくだよ！」
なんとなく？
「・・・ぷっ、あっはははははははは！」
何年間も、トラウマから、過去から逃げて来た。
本当に、一世一代の決意で、立ち向かおうと決めたのに。頑張ろうと思ったのに。
俺を焚き付けた張本人の行動原理は、なんとなく。
俺はなんとなくで、過去に立ち向かうのか。
・・・そんぐらい、しょーもない事だったのかな、俺の過去って。
結局。
俺自身が弱かっただけか。
「あ、アキ君やっと笑ったね！」
「ははははっ・・・あー腹筋が崩壊寸前だ。よくもやったなこのヤロー」

「えへへ～。悔しかったらアキ君も、私を笑わせてみたら？」

と。

さっきまでとは違う、悪戯っぽい笑みを浮かべて、平沢は言った。

俺は降ってくる桜の花びらを見ながら考えて、また笑いが出てきた。

「いや・・・いいや」

あんなに思いっきり笑ったのは、本当に久しぶりだった。

妙に気分が清々しい。大声出して笑うのって、あんなに気持ちよかったかな。

とりあえず、明日から心機一転、小学一年生チックな決意を秘め、

俺は今度こそ帰路につく。

平沢に一言残して。

「だってお前、いっつも笑ってんじゃん」

笑顔！！（後書き）

週一回くらいのペースで上げていこうと思ってます。
万が一、予想より読者様が多ければもう少し早めます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9871x/

れんあい!!〜けいおん!!×恋愛〜

2011年10月28日06時10分発行